

常願寺川東岸地域の地理学的研究

— 売薬兼業農家を中心として —

浅 野 光 子

第1章 地域の概説

第3章 売 薬

第2章 農 業

第4章 要 約

売薬行商の有するいかなる特性が、あるいはその出身地域のいかなる自然的・経済的・社会的条件が、いかなる形態の売薬兼業を成立・発展せしめたのであろうか。これを成立当時から行商人の出身がみられ、一時はその大中心地ともなり、隆盛を極めた水橋町を中心とし、それを包含する常願寺川東岸地域において考察した。

農家において兼業はその要否と可否、即ち、収入の大小と労働力構成によって決定される。更にそれは労働力の需要源の有無と大きく関連する。これらの要否、可否、労働力需要源の有無というのは当地域の自然的・経済的・社会的条件を如実に反映していると考えられる。即ち、地域の性格殊に、地域の農業経営の本質にこそ農業との売薬兼業の成立発展の基盤があると考えられる。第1・2章においては地域の性格を述べ、特に農業に関して詳細に述べた。又、売薬兼業は、地域構成要素の相互関連上に立脚していると同時に、過去を包含している。時代毎の社会的・経済的基盤の相違は売薬兼業を大きく左右した。第3章に於てはこうした過去を把握し、それを反映すべく現状を明らかにした。40年に於て、行商人の割合は水柳6.6%、舟橋村3.1%、立山町0.6%である。

当地域は、常願寺川の沖積地であり、冬季に積雪をみる気候は、古くから水稻単作地帯を展開せしめてきた。ここに売薬兼業成立の根本的要因があると考えられる。1毛作、狭少な耕地面積、低位生産性は多数の貧農を生み出し、農業と補充関係にある季節性を有する売薬行商は、兼業として彼らには恰好の存在であった。

当地域内はおろか、戦前までは隣接の富山市に於てさえ労働力需要源が不在であったため、農業を後継すべき長男にとつてはいうまでもなく、二・三男にとつても売薬行商は貴重な存在であり、行商人は急増した。換言すれば工業の未発達であったことも要因の1つとして忘れられぬ。しかしながら近年に至って、富山市からの工業の波及効果や当地域内に於ける第2・3次産業の急速の発展の影響を、当地域が受容する様になってからは全く異った事態を呈することになった。農業と他産業間の格差が拡大した為に9割以上の農家が兼業農家となり、それに随伴して急速に機械化が進

展した。

青少年が大企業に集中したのみならず、野業の基幹労働力までも兼業に従事するようになった。売薬兼業農家も当然この大きな変動のなかにある。即ち、行商人の減少となって現われた。後継者不足、あるいは行商人の転向によって売薬兼業農家の転向が生じる。又、機械化に裏うちされて農業が年中行事可能になった為、売薬への兼業指向性が減ずる。

しかしながら、この減少傾向と町部から農村部への懸場帳の流れを考慮すれば、一方に於て、売薬兼業農家の固定化と行商の大規模化が考えられる。転向した売薬兼業農家というのは他を兼業した方がより高収入を得られる程度の行商規模の農家と思われるので、売薬兼業農家は比較的行商規模の大きな農家に固定化していると考えた。即ち、戦前農村プロレタリアとして売薬兼業を開始し、売薬に全力を投下した小農家と、戦後農村ブルジョアとして大規模に開始した大農家に固定化していると推察した。大規模化は機械化に大きく裏うちされている。

行商という形態から当然交通系も成立発展の要因の1つとして考えられる。それは、江戸期においては北陸街道、明治に入ってから北陸本線沿いに出身が集中した事に示されている。

当地域には二者共存在したが、交通の発達により、大正期頃よりこの要因は消滅してしまったと考えられる。

調布市・府中市の都市的發展過程

— 犬 飼 浩 子 —

調布市・府中市の自然的背景としての特徴は、この二市が、地形的には多摩川に平行した地形面を形成する沖積低地・立川段丘・武蔵野段丘上に位置していること、地質的には砂礫層やローム層が卓越していること、地下水は扇状地性台地の武蔵野段丘上では深くに、周辺では浅くに存在していることである。そしてこの地形、地質、水系は、人文的背景である歴史・集落に多大の影響を与え、各々の地形面における差がはっきりと出ている。つまり沖積低地は自然発生的散型集落地として、立川段丘上は自然発生的擬型集落地として、武蔵野段丘は計画的な新田集落として発達している。又、用水路についても野川・仙川・入間川その他、沖積低地面は多摩川から、台地では玉川上水からそれぞれ引水している。これらに見られるように、自然的背景と人文的背景は相互に関連し合っており、二市の地域的性格の基礎を成しているわけである。次に江戸時代以後の二市の發展過程を見ると、この頃から全国的な人口移動が激しくなり、それだけに交通路線が地域の發展に与える影響は大となる。まづ江戸時代に甲州街道筋が宿場として栄え、武蔵野新田集落の親村となった。明治時代になり、